

コリントの信徒への手紙一・二 通 読

10月



(10月30日)「コリントの信徒への手紙二 3:7~11」

人を罪に定める務めが栄光をまもっていたとすれば、人を義とする務めは、なおさら、栄光に満ちあふれています。

(コリントの信徒への手紙二 3章 9節)

- ・旧約の預言者モーセは、エジプトから出てカナンに向かう途中のシナイ山で、神さまから十戒を受け取ります。その際シナイ山から降りて来たモーセの顔の肌は、光を浴びていたそうです(出 34:30)。
- ・パウロは霊に仕える務めにあるならば、なおさら栄光を帯びているはずだと言います。わたしたちは神さまに連なり、その栄光の元で日々を送っています。だとすれば、わたしたちもまた光り輝いているのです。
- ・自分を誇るための光ではなく、暗闇にいる人を照らす光として、わたしたちは様々な場所に遣わされています。自分の光を隠してしまうのではなく、光を求めている人の前で輝かせることができればと思います。

(10月31日)「コリントの信徒への手紙二 3:12~18」

しかし、主の方に向き直れば、覆いは取り去られます。

(コリントの信徒への手紙二 3章 16節)

- ・昨日の箇所で、モーセの顔が光り輝いていた場面が取り上げられていました(出 34:30)。そのときにイスラエルの人々は、モーセの顔に覆いをかけます。神さまの光を直視できないと考えたからです。
- ・しかしイエス様が来られたことによって、その覆いは取り除かれることとなります。神さまとわたしたちとは、新しい関係に入っていくのです。イエス様が十字架上で息を引き取られたとき、至聖所の垂れ幕が引き裂かれました。神さまとの間の溝が、取り除かれたのです。
- ・わたしたちは今、神さまの栄光を素直に映し出しているでしょうか。「神さま、感謝します!」、「神さまがなさってくださいましたのです!」、そのように証しするとき、わたしたちの顔は神さまの栄光で輝いていることでしょう。

(10月1日)「コリントの信徒への手紙一 13:8~13」

それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。

(コリントの信徒への手紙一 13章 13節)

- ・ここでパウロは、預言や異言や知識と、愛とを対比させます。聖書の愛という言葉は原語のギリシア語では「アガペー」という単語であり、わたしたちが日常的に使っている異性間の愛とはニュアンスが少し違います。
- ・異性間の愛は、ギリシア語では「エロース」です。「アガペー」は簡単にいうと、見返りを求めず、一方的に注がれる愛のことです。昔、日本に聖書が入って来たとき、ある翻訳者はこの言葉を「御大切」と訳しました。
- ・まず神さまがわたしたちにシャワーのように愛を注がれ、その愛をわたしたちは周りの人にもお裾分けする。その根底が、一番大切なのだとパウロは語ります。これは結婚式の説教でも、よく語られる言葉です。

(10月 2日)「コリントの信徒への手紙一 14 : 1~5」

異言を語る者が自分を造り上げるのに対して、預言する者は教会を造り上げます。

(コリントの信徒への手紙一 14 章 4 節)

- ・昨日の箇所パウロは、霊的な賜物である預言・異言・知識は愛という最高の賜物と違い、やがて廃れていくのだと語ります。コリントの人たちは、「熱狂主義」と呼ばれる人たちの行為についてパウロに質問していました。
- ・彼らの中には、預言や異言を語っていた人たちがいました。「預言」とは未来の予告である「予言」とは違い、神さまの言葉を預かるという意味があります。聖書の言葉などを説き明かして、神さまの思いを人に伝えるのです。
- ・それに対して「異言」は、周りの人には理解できない言葉を語る、神さまへの語りです。それは自分のためだけのもので、教会のためにはならないとパウロは指摘します。わたしたちの信仰は、周りの人たちと共有しながら強められていくのです。

(10月 3日)「コリントの信徒への手紙一 14 : 6~12」

あなたがたの場合も同じで、霊的な賜物を熱心に求めているのですから、教会を造り上げるために、それをますます豊かに受けるように求めなさい。

(コリントの信徒への手紙一 14 章 12 節)

- ・「教会用語」という言葉があります。簡単にいうと、教会でしか通用しない言葉です。教会に行き始めたとき、週報に、〇〇兄、〇〇姉と書かれているのを見て、「何で弟や妹は参加していないんだろう？」と疑問に思ったことがあります。
- ・「主日」、「贖い」、「救い」、「罪」、「陪餐」、「預言」などなど、わたしたちにとっては日常語でも、初めて聞く人には外国語（あるいは自分が知っている意味と違う言葉）に聞こえてしまうことも多くあります。
- ・それらの言葉は、異言と変わらないのかもしれませんが。わたしたちは何のために語るのか。それは神さまの愛を伝え、教会を造り上げるためです。であるならば、相手に届く言葉を語る必要があるのではないのでしょうか。

(10月 28日)「コリントの信徒への手紙二 2 : 12~17」

救いの道をたどる者にとっても、滅びの道をたどる者にとっても、わたしたちはキリストによって神に献げられる良い香りです。

(コリントの信徒への手紙二 2 章 15 節)

- ・パウロの時代、ローマの兵士たちが戦場で勝利したときには、凱進行進の途中で香をたくという習慣があったそうです。そのときには捕虜も連れられていたようですが、彼らにとってその香は、「死に至らせる香り」だったのかもしれない。
- ・キリスト者の信仰を、「香り」として表現することがあります。その人の生き方や人への接し方、笑顔などを見ると、「あの人からはキリストの香りがする」という言い方をすることがあります。
- ・やさしさを押し付けるのではなく、そばにいて何となくうれしい存在になれば、本当に嬉しいことだと思います。わたしたちの身体からは、キリストの香りが漂っているのでしょうか。考えてみたいと思います。

(10月 29日)「コリントの信徒への手紙二 3 : 1~6」

神はわたしたちに、新しい契約に仕える資格、文字ではなく霊に仕える資格を与えてくださいました。文字は殺しますが、霊は生かします。

(コリントの信徒への手紙二 3 章 6 節)

- ・日本聖公会では聖職を目指すとき、あるいは神学校に入学しようとするときには、教会の推薦状を求められます。「教会から押し出された形」で奉仕の業に就くというのが、その考え方の根底にあります。
- ・今日の箇所を読むと、パウロの時代にも使徒職というものに対して推薦をする慣習があったようです。パウロはコリントの人たちを、自分の使徒職を証明する生きた推薦人だと考えます。
- ・文字に書かれたものも大切かもしれませんが、それよりも大切なのは霊だということです。司祭が按手されるときも、「推薦の証」よりも手を置かれ、みんなで祈ったという事実の方が残っていくのです。

(10月 26日)「コリントの信徒への手紙二 2:1~4」

わたしは、悩みと愁いに満ちた心で、涙ながらに手紙を書きました。あなたがたを悲しませるためではなく、わたしがあなたがたに対してあふれるほど抱いている愛を知ってもらうためでした。

(コリントの信徒への手紙二 2章 4節)

- ・パウロが初めてコリントに行ったのは、教会をつくったときでした。きっと喜びにあふれ、パウロとコリントの人たちも共に神さまを賛美していたことでしょう。しかしその後パウロの耳には、コリントの人たちのよくない噂が入るようになります。
- ・そこでコリントの信徒への手紙一を書き、またその後でパウロはコリントに立ち寄ったようです。しかしその訪問は、パウロにとってはあまり良いものとはならなかったようです。
- ・その経験があるから、自分が行くことでコリントの人たちは悲しみに落とされるに違いないと悟っているのです。パウロは立場上、厳しい言葉を言わないといけませんでしたが、でもその根底には愛があるということを、手紙の中で涙ながらに訴えるのです。

(10月 27日)「コリントの信徒への手紙二 2:5~11」

あなたがたが何かのことで赦す相手は、わたしも赦します。わたしが何かのことで人を赦したとすれば、それは、キリストの前であなたがたのために赦したのです。

(コリントの信徒への手紙二 2章 10節)

- ・「悲しみの原因となった人」とは、誰を指すのでしょうか。パウロを批判していた人でしょうか。それとも「みだらな行い(一コリ 5:1)」をしていると指摘されていた人でしょうか。具体的には何も書かれていません。
- ・パウロは前の訪問の際、そのような人を他の信徒の前で糾弾したのでしょうか。その人は立場を失い、もしかすると共同体から排除されたかもしれません。そのことが教会の悲しみになっていたと思います。
- ・しかしパウロは、その人を赦すようにと促します。さらに愛するようにとも付け加えます。罪を指摘し、その人を排除していくことはとてもたやすいことです。しかしその人を赦して受け入れること、とても大変なことなのです。

(10月 4日)「コリントの信徒への手紙一 14:13~19」

では、どうしたらよいのでしょうか。霊で祈り、理性でも祈ることにしましょう。霊で賛美し、理性でも賛美することにしましょう。

(コリントの信徒への手紙一 14章 15節)

- ・日本聖公会は、「聖書・伝統・理性」を重んじ、あらゆる絶対主義を否定し、解釈し続ける共同体だといわれます。聖書だけを絶対視せず、伝統だけにとらわれず、理性によって模索しながら歩いていく教会です。
- ・パウロはここで、「理性」について語ります。「異言を語る賜物」は確かに素晴らしいものなのでしょう。しかしその力を自分のものだけにしまい、ただ人に対して誇示するだけであれば、そこに何の意味があるのかということです。
- ・そうではなく、教会を形成するためにどう生かしていくのか、「理性」によって求めていきなさいと伝えるのです。それは何よりも、新しく教会に加わる人のためにということです。この考え方は、わたしたちの教会にも必要なことなのでしょう。

(10月 5日)「コリントの信徒への手紙一 14:20~25」

このように、異言は、信じる者のためではなく、信じていない者のためのしるしですが、預言は、信じていない者のためではなく、信じる者のためのしるしです。

(コリントの信徒への手紙一 14章 22節)

- ・パウロはここで、「子ども・幼子」と「大人」という言葉を用います。子どもは与えられたものに対して有頂天になり、人に見せびらかせてしまいます。異言を人前で語るというのはそういうことだよ、とパウロは語るのです。
- ・そうではなく、大人になりなさい。興奮した状態のまま礼拝に参加するのではなく、理性をもって周りを見渡し、新しく来た人たちをつまずかせないように配慮しなさいというのがパウロの主張です。
- ・ただ 24節の、「信者でない人が預言によって罪を指摘され、ひれ伏して神さまを礼拝する」という目的については、少し怖い気がします。教会がそのような裁きの場になるのも、何か違うような気がします。

(10月 6日)「コリントの信徒への手紙一 14:26~32」

解釈する者がいなければ、教会では黙っていて、自分自身と神に対して語りなさい。
(コリントの信徒への手紙一 14章 28節)

- ・パウロは今日の箇所、異言と預言に関する議論を終えます。当時コリントの教会では、礼拝に参加している人が口々に異言を語り、全体の雰囲気を作っていたようです。パウロはそうではなく、秩序ある礼拝をするように求めます。
- ・異言を語る人は、旧約聖書にも出てきていました。ただそこに解釈がなければ、ただの興奮状態です。それでは新しく来た人はどう思うのだろうか、ということのパウロは伝えようとしているのです。
- ・現代も異言を語る教会があります。パウロは異言を語ることを禁止しようとしたのではなく、それが礼拝の中心に位置づけられることによって、礼拝自体が無秩序になっていくことを危惧したのでしょう。わたしたちも「理解できる言葉」で神さまの言葉を語りましょう。

(10月 7日)「コリントの信徒への手紙一 14:33~40」

それとも、神の言葉はあなたがたから出て来たのでしょうか。あるいは、あなたがたにだけ来たのでしょうか。

(コリントの信徒への手紙一 14章 36節)

- ・聖書の言葉は、時に剣になります。今日の箇所には「婦人たちは、教会では黙っていなさい」という言葉があります。この言葉を礼拝の中でそのままメッセージとして語ると、大変なことになるでしょう。
- ・この言葉だけをみると、パウロは女性蔑視をしているようにみえてしまいます。しかし使徒言行録や手紙の中で、パウロは女性たちも同労者として認めていました。今日の箇所の女性観は、ユダヤ社会の中で一般的なものだったのでしょうか。
- ・最後にパウロは、預言することを熱心に求めるように語ります。しかし異言を語ることについては、禁じてはならないとも言います。「あれはいい、これはダメ」ではなく、どのように生かしていくのが大切なのです。

(10月 24日)「コリントの信徒への手紙二 1:15~22」

神の約束は、ことごとくこの方において「然り」となったからです。それで、わたしたちは神をたたえるため、この方を通して「アーメン」と唱えます。
(コリントの信徒への手紙二 1章 20節)

- ・わたしたちの日常生活の中でも、前もって立てていた計画が変更されることがあります。前もって計画を立てていた日に後から別の用事が入って、前の予定をキャンセルすることもあるでしょう。
- ・パウロはコリントにもう一度行く計画を立てていたようでした。しかしそれが叶わなくなってその連絡をしたときに、コリントの人たちはパウロを不誠実な人間だと非難したようです。
- ・しかしパウロはここでも、自分がどこに行くのかということは自分が決めることではなく、神さまのみ心に従っているのだと強調します。すべてを備えて導いてくださるのは、他ならぬ神さまなのです。

(10月 25日)「コリントの信徒への手紙二 1:23~24」

わたしたちは、あなたがたの信仰を支配するつもりはなく、むしろ、あなたがたの喜びのために協力する者です。あなたがたは信仰に基づいてしっかり立っているからです。

(コリントの信徒への手紙二 1章 24節)

- ・パウロはコリントに行かない理由を、「あなたがたへの思いやり」と表現します。きっとコリントに行ってしまうと、コリントの人たちを叱責し、厳しい態度を取ってしまうことが分かっていたのでしょうか。
- ・でもそのことは、神さまのみ心ではなかったということなのではないでしょうか。怒ったパウロがコリントの人たちの悪い部分を指摘し、コリントの人たちの態度が改まったとしても、それはパウロの功績になるかもしれません。
- ・そうではなく、神さまが直接コリントの人たちに働きかけ、神さまの恵みを直接感じていくことが必要だったのです。余計な「介入」や「干渉」は必要ない、このことはわたしたちも覚えておきたいことです。

(10月 22日)「コリントの信徒への手紙二 1 : 8~11」

わたしたちとしては死の宣告を受けた思いでした。それで、自分を頼りにすることなく、死者を復活させてくださる神を頼りにするようになりました。

(コリントの信徒への手紙二 1 章 9 節)

・神さまはどうしてわたしたちに苦難を与えられるのか、その一つの答えがここには書かれています。パウロは以前、アジア州で大きな苦難にあいました。それは死の宣告を受けたと感じるほどのものだったようです。

・しかしそのときに、パウロは心から神さまを頼りました。自分の力に頼らずに、神さまにすべてを委ねたのです。「わたしは弱いときにこそ強い」と別の箇所パウロは語りますが、まさにその通りなのです。

・わたしたちも自分の力に頼り、もがき苦しむことがあります。しかしその絶望の中において、一筋の光が差し込んでくるとき、その光こそが神さまからのお恵みなのです。神さまにすべてを委ね、歩んでまいりましょう。

(10月 23日)「コリントの信徒への手紙二 1 : 12~14」

わたしたちは世の中で、とりわけあなたがたに対して、人間の知恵によってではなく、神から受けた純真と誠実によって、神の恵みの下に行動してきました。このことは、良心も証しするところで、わたしたちの誇りです。

(コリントの信徒への手紙二 1 章 12 節)

・パウロがここでいう「誇り」とは、いわゆる「プライド」ではありません。イエス様と共に歩むことができる安心感と、イエス様に対する信頼をあらわす言葉です。

・パウロは手紙の中で、何度も自分は「使徒」であることを強調していきます。ここでも「神の恵みの下に行動してきた」神に属する者としての「誇り」を、コリントの人たちに伝えているのです。

・そしてその「誇り」は、パウロだけでなくコリントの人たちにも与えられています。お互いがお互いを理解し、その「誇り」を認め合っていくときに、双方に信頼関係が生まれていくのでしょうか。

(10月 8日)「コリントの信徒への手紙一 15 : 1~11」

わたしは、神の教会を迫害したのですから、使徒たちの中でもいちばん小さな者であり、使徒と呼ばれる値打ちのない者です。

(コリントの信徒への手紙一 15 章 9 節)

・アメイジング・グレイスという聖歌があります。ジョン・ニュートンという英国の牧師が作詞した曲です。彼は若い頃、奴隷貿易に関わっていました。しかし 22 歳の時に転機が訪れます。

・彼の乗っていた船が転覆の危機に陥り、そのときに彼は必死に神さまに祈ります。そのとき、彼は神さまの恵みを感じたのでしょうか。後に作詞された「アメイジング・グレイス」は、多くの人の心を打ち、今も愛されています。

・パウロはここで、神さまの恵みによって自分も変えられたと語ります。神さまの恵みとは、復活のイエス様との出会いです。そしてわたしたちも復活のイエス様と出会い、変えられていくのです。

(10月 9日)「コリントの信徒への手紙一 15 : 12~19」

そして、キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお罪の中にあることになります。

(コリントの信徒への手紙一 15 章 17 節)

・キリスト教の中心は、十字架と復活だと言っていると思います。イエス様の十字架によってわたしたちの罪は贖われた。そしてイエス様の復活によって、「わたしはいつまでもあなたがたと共にいる」と約束された。

・しかし十字架は歴史的事実なのに対して、復活は「科学的証明」ができないものです。そのため現代でも、復活や聖霊についてはなかなか受け入れることができないという方もおられます。

・しかし、神さまがそのようなしてまでわたしたちを愛しておられるという、聖書に通奏低音のように流れる思いに立ったとき、わたしたちの常識の中で神さまの恵みを測ること自体おかしなことかもしれません。人にはできなくても、神さまにはすべてが可能なのです。

(10月10日)「コリントの信徒への手紙一 15:20~28」

つまり、アダムによってすべての人が死ぬことになったように、キリストによってすべての人が生かされることになるのです。

(コリントの信徒への手紙一 15章 22節)

・イエス様はどうして復活なさったのでしょうか。それは福音書の復活物語にあるように、「あなたがたに平和があるように」と伝えるためです。また今日の箇所を書いてあることも、その理由の一つです。

・それは、「すべての人を生かす」ということです。最初の人アダムの罪(神さまに食べてはならないと命じられていた木の実を食べてしまった)によって、人間は死に定められていました。

・しかしイエス様が自ら陰府(よみ)に下り、そこから人々をいのちへと導かれたのです。そのいのちをわたしたちすべての人がいただくことが、神さまの大きな願いなのです。この言葉は、わたしたちにとって素晴らしい福音です。

(10月11日)「コリントの信徒への手紙一 15:29~34」

兄弟たち、わたしたちの主キリスト・イエスに結ばれてわたしが持つ、あなたがたに対する誇りにかけて言えば、わたしは日々死んでいます。

(コリントの信徒への手紙一 15章 31節)

・コリントの人たちは、死者のために洗礼を受けていたようです。これは洗礼を受ける機会がなく、死んでしまった人の代わりに生きている人(肉親など)が受けていたということです。現在のキリスト教には、このような習慣はありません。

・パウロはこの手紙の中で「死者の復活」という言葉を多く用いますが、わたしたちが普段用いている言葉でいうと、「永遠の命」の方が近いかもしれません。死者の復活という、お墓の中から甦るイメージです。

・お墓から生き返るのではなく、死の向こうにも新しいいのちがあるとしたら、あなたたちはどうしますか?と問いかけているのです。そして、明日は死ぬのだからとその日一日だけ楽しむのはどうなのかとパウロは聞くのです。

(10月20日)「コリントの信徒への手紙二 1:1~2」

わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。

(コリントの信徒への手紙二 1章 2節)

・今日からコリントの信徒への手紙二に入ります。ローマ、コリント一、コリント二と続いていくので、何だか同じ文章を何度も読まされているような気持ちになってしまうかもしれません。

・しかしこの手紙には、他の手紙にはない大きな特徴があります。それは、パウロが「自分語り」をしていくというところです。パウロは自分の使徒職の正当性を詳しく説明していきます。

・その中でパウロは、自分の感情や思いをコリントの人たちに生き生きと伝えていきます。そしてわたしたちはこの手紙を通して、パウロという人物を感じることができるのです。さあ今日から、イエス様の恵みと平和を感じながらこの手紙を読み進めていきましょう。

(10月21日)「コリントの信徒への手紙二 1:3~7」

キリストの苦しみが満ちあふれてわたしたちにも及んでいるのと同じように、わたしたちの受ける慰めもキリストによって満ちあふれているからです。

(コリントの信徒への手紙二 1章 5節)

・わたしたちの目の前に、二つの道があったとします。一つは「慰めの道」、もう一つは「苦難の道」。さあ、どちらを選びますか?と問われたら、多くの人は「慰めの道」を選ぶことでしょう。

・しかしイエス様の十字架に与るということは、イエス様が受けた慰めだけではなく苦難をも自分の身にまとうことを意味します。「自分の十字架を背負う」ということが、ここで言われているのです。

・教会に連なるということは、すべての苦しみから解放されるということではありません。ともすると、苦しみが増し加わることさえあるでしょう。しかしそれこそが、イエス様に従うということなのかもしれません。

(10月18日)「コリントの信徒への手紙一 16:13~18」

目を覚ましていなさい。信仰に基づいてしっかり立ちなさい。雄々しく強く生きなさい。
(コリントの信徒への手紙一 16章13節)

- ・パウロはこの手紙の最後に、「目を覚ましていなさい」から始まる勧告を書きます。終末が近づいているという緊張感の中で、あなたがたは強く雄々しく生きなさいとコリントの教会を励ますのです。
- ・そして中心的な人たちの名前を挙げて、その労をねぎらいます。ステファナたち家族は、コリントがあるアカイア州でパウロに洗礼を授けられました。彼らはパウロがそのときいたエフェソに、あいさつに来たのでしょう。
- ・そのときにステファナは、コリントの現状も報告したのかもしれませんが。パウロは彼らの名前を挙げることで、「あなたがたも初心に帰りなさい」と促しているようにも思います。教会の群れは、パウロ一人で築き上げられたわけではないのです。

(10月19日)「コリントの信徒への手紙一 16:19~24」

わたしパウロが、自分の手で挨拶を記します。主を愛さない者は、神から見捨てられるがいい。マラナ・タ (主よ、来てください)。
(コリントの信徒への手紙一 16章21~22節)

- ・ここまでパウロは口述筆記によって手紙を書いてきましたが、21節以降は自分の手で書き記します。22節の言葉は、礼拝の中で唱えられていた言葉のようです。特に「神から見捨てられるがいい」という部分は「アナテマ」と呼ばれる、呪いの言葉です。
- ・以前の「文語祈祷書」にはアタナシオ信経というものがありました。このような一文で始まります。「救はれんと願ふ者は、聖公会の信仰箇條を奉ずること最も肝要なり。此の信仰箇條を乱すことなく、全く守る者にあらざれば必ず世々限りなく亡ぶべし」。
- ・とても怖い言葉です。しかしその言葉も、聖書に基づいていたのです。ただパウロは最後に、「わたしの愛が」と語ります。問題の多いコリントの人たちだけれども、パウロはその人たちを愛してやまないのです。

(10月12日)「コリントの信徒への手紙一 15:35~41」

あなたが蒔くものは、後でできる体ではなく、麦であれ他の穀物であれ、ただの種粒です。
(コリントの信徒への手紙一 15章37節)

- ・「死者はどんなふうに復活するのか?」、その問いはコリントの人たちだけでなく、わたしたちも持っているのかもしれませんが。「愚かな人だ」と言われようとも、その答えを知りたいという気持ちは否定できません。
- ・しかし自然界を見渡してみても、「なぜそうなるのか」がわからない現象は至るところにあります。どうして小さな種から草花が育っていくのか、どうして夜空には様々な星たちがあるのか。
- ・わたしは復活について聞かれたときに、こう答えることがあります。「そのときのお楽しみにしましょう」と。神さまはわたしたちの思いを超えて、わたしたちに良いものを与えて下さいます。そのことを信じて歩みましょう。

(10月13日)「コリントの信徒への手紙一 15:42~49」

つまり、自然の命の体が蒔かれて、霊の体が復活するのです。自然の命の体があるのですから、霊の体もあるわけです。
(コリントの信徒への手紙一 15章44節)

- ・パウロはここで、「自然の命の体」と「霊の体」という言葉を用いて、死者の復活を説明していきます。まず「自然の命の体」とは、わたしたちが生まれながらに与えられている体のことでしょう。
- ・その「自然の命の体」は朽ち、卑しく、弱いものだとパウロは書きます。わたしたちは確かに、年齢を重ねる中で肉体の衰えを感じることがあります。またいつか必ずやって来る死に対しても、恐怖を覚えます。
- ・しかしイエス様に出会い、新しいいのちに生かされるとき、わたしたちには「霊の体」が与えられるのです。その体は朽ちず、輝かしいものであり、そして力強いものです。イエス様によって、わたしたちは新しくされるのです。

(10月14日)「コリントの信徒への手紙一 15:50~58」

わたしはあなたがたに神秘を告げます。わたしたちは皆、眠りにつくわけではありません。わたしたちは皆、今は異なる状態に変えられます。

(コリントの信徒への手紙一 15章 51節)

- ・パウロがコリントに手紙を書いていた頃、再臨(天に昇られたイエス様が再びやってくる)はすぐにでも起こると思われていました。ですから「死者の復活」とは、再臨のときにすでに天に召された人がどうなるのか、ということが話題になっていました。
- ・イエス様が再臨する日、つまり終末が来る前に、人々はその備えをしていました。しかしその日が遅くなり(再臨の遅延)、イエス様の十字架から2000年以上経った今もまだ再臨は来ていません。
- ・もしかしたら今日、最後のラッパが吹かれるかもしれません。でも心配しないでください。あなたの体も朽ちない霊の体になっているからです。イエス様と共に歩むとき、わたしたちは死さえも恐れることはないのです。

(10月15日)「コリントの信徒への手紙一 16:1~4」

聖なる者たちのための募金については、わたしがガラテヤの諸教会に指示したように、あなたがたも実行しなさい。

(コリントの信徒への手紙一 16章 1節)

- ・コリントの信徒への手紙一も、最後の章に入りました。ここでパウロは、募金について語ります。「聖なる者たち」とはエルサレム教会のことです。彼らは決して裕福ではありませんでした。
- ・エルサレム教会に集う彼らの多くはユダヤ人でしたが、ユダヤ教の宗教指導者たちとは異なっていました。そのため彼らは、経済的援助を受けなければいけない状況だったようです。そこでパウロは彼らのために、募金を呼び掛けたのです。
- ・この募金はパウロが宣教した異邦人教会と、ユダヤ人によるエルサレム教会とを結びつける役割を果たしました。決して「上納金」というものではなく、支えあう関係を目指していったのです。

(10月16日)「コリントの信徒への手紙一 16:5~9」

わたしは、今、旅のついでにあなたがたに会うようなことはしたくない。主が許してくだされば、しばらくあなたがたのところに滞在したいと思っています。

(コリントの信徒への手紙一 16章 7節)

- ・パウロはこの手紙を、エフェソで書いていたようです。そして次の旅行の計画を、手紙の終わりの方に綴っていきます。今のようにメールや電話はありませんから、自分の予定をあらかじめ伝えておくのはとても大切なことです。
- ・パウロはマケドニア経由でコリントに行くと書いていますが、マケドニア州にはテサロニケやフィリピといった場所がありました。そこにもパウロは教会共同体をつくり、聖書にはそこに宛てた手紙も残っています。
- ・旅に適さない冬の間はコリントに滞在して、じっくりとコリントの問題に向き合おうとするパウロの姿勢がここに見えます。ただし「主が許してくだされば」と、あくまでも神さまの思いの中で自分は遣わされていることを忘れてはいません。

(10月17日)「コリントの信徒への手紙一 16:10~12」

テモテがそちらに着いたら、あなたがたのところで心配なく過ごせるようお世話ください。わたしと同様、彼は主の仕事をしているのです。

(コリントの信徒への手紙一 16章 10節)

- ・パウロはここで、同労者テモテについて「お世話ください」と頼みます。テモテの母親はユダヤ人でしたが、父はリストラ出身の非ユダヤ人、いわゆる「異邦人」でした。そのために軽く見られることもあったでしょう。
- ・しかしパウロは、彼をないがしろにはしないと伝えます。テモテはコリントに行ったのち、パウロのいるエフェソに合流する予定のようです。そこまで言われると、誰も無下に扱うことはないでしょう。
- ・そして次に出てくるアポロという人物は雄弁家で、コリントの教会でも人気があったようです。しかしパウロと行動を共にしたという事実もなく、どのような思想であったのかも残されていません。にしてもパウロの書き方は、アポロに対して冷たく感じますが。